

極樂寺ごくらくじ

〔芝薬師しばやくしの西に隣る、時宗にして藤沢に属す。初めは天台宗たいたいしゅうにして恵心僧都ゑしんしんの開き給ふ、一条戻橋でうもとりばしのひがしにあり、後世こゝにうつす〕

本尊毘沙門天あしん 〔恵心の作、立像五尺三寸。脇士、左、大黒天、菅神御作、二尺許。右、蛭子神、運慶うんけいの作、立像一尺

二寸許〕

東北院とうほくあん

〔極樂寺ごくらくじの西に隣る、時宗にして藤沢に属す。本堂の額は東北院とうほくあんと書して、後西院ごさいあんの宸筆なり〕

本尊辨財天てんけうだいし 〔伝教大師の作、立像二尺三寸許。脇士、左、毘沙門天同作、右、大黒天〕

関白道長公像みちなが 〔衣冠束帯坐像、一尺許。道長公みちながは関白兼家公かねいへの男、正一位摂政太政大臣、万寿四年十二月四日薨御す、

法成寺殿ほふしやうじと号す〕 和泉式部塔いづみしきぶの 〔寺内にあり〕

雲水井 〔堂前の西にあり〕 軒端梅 〔同所にあり〕

抑いにしへの東北院とうほくあんといふは、上東門院じやうとうもんあんの御願にて、御父御堂関白道長公みちながの棲給ふ法成寺ほふしやうじの傍につくらせ給ふと、続世

継に見へたり。拾芥抄しゅうがいしょうには、一条の南京極きやうきくの東なる上東門院じやうとうもんあんの御所、法成寺ほふしやうじの内、東北の隅なりとぞ。扶桑略記には、

長元三年八月廿一日上東門院東北院とうほくあんを供養ありしよしを書り。落慶らくけいの導師は僧正慶命けうみやうなりと、釈書にのせたり。又永承

五年十月十三日には、天皇東北院に行幸ある由、百練抄ひやくれんしょうにあり。しかあれば、いにしへは伽藍巍々壯麗にして、天台宗

の淨刹なり。其旧地は今の京極通清和院御門きやうごくとうせいわゐんごもんの北、遣迎院廬山寺等けんかうろさんじの地なり。委は愚撰の平安旧図考に載たり。〔和泉式部塔しきぶの、雲水軒端梅は今所々にあり、皆東北といふ謡曲によりて後世作ると見へたり。当寺の再興は元禄年中なり〕

東北院のわたどの、やり水に影を見て読侍ける

続後撰

影みてもうき我なみだ落そひてかごとがましき瀧の音かな

紫式部

もとしんによだう
元真如堂

〔真如堂しんによだうの北、下壇の地なり。真如堂の本尊、初め叡山常行堂えいざんじやうぎやうだうに在せし時、一条院でうゐんの母后白河女院しらかはにょゐん、又叡

山ざんの戒算上人かいさんにも、末世女人済度の為花洛に下るべし、其所には尺余の檜木千本一夜に生ずるよし靈夢あり。忽ち白河女院にょゐんの殿舎の境地檜木生出けり、此所は其時の旧地なり〕

本尊阿弥陀仏〔慈覺大師じかくだいしの作、立像三尺二寸〕白河院宸影しらかはのゐん、同女院御影〔共に画影なり〕蓮華童子附属瑠璃壇〔真如

堂だう草創の時、童子壹人蓮華織の錦の囊に土を包て持来り。是は天竺三王てんぢく舎城耆闍崛山きじゃくつの土なり、仏觀無量寿經を説給ふ時、無數の衆生法を聴て得道し、且頻婆娑羅王ひんばしやらわうゐ韋提希夫人だいいけぶにん往生をとげ、阿闍世王あじゃせも善道に帰入せし、其説法の座下の土なり、

早七宝の壇を築て此靈土を収め、其上に如来を坐しめ奉れと告る。又曰、我名を蓮華童子といふ、われ永くこゝに住んで仏法を擁護すべし、如来在坐の所には必醍醐味の清泉あらん、仏闍のほとりに闍伽井を掘べし、是我住所なりといひ畢て去りぬ〕醍醐水〔堂の北下壇の地にあり〕

東三條院とうさんねん

〔同所にあり、五輪石塔婆なり〕

神樂岡かぐらをか

〔吉田山をいふ、由縁前編に見へたり〕

新 六

君が代を祈るいのりの神樂岡松も千年の色やそふらん

衣笠内府

続撰吟岡篠

露霜のふれる音のみさやぐなり神樂をかへのすゝの篠原

道 興